様式 6：終了時活動報告書様式

2023年7月8日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業 活動報告書

1. 業務の概要	
(1)事業名	「セネガルにおけるスポーツを通じた障害者のエンパワメントと社会参加促進活動」(チャレンジ枠)
(2)実施団体名	一般社団法人 WITH PEER
(3)実施期間	2022 年 11 月 24 日～2023 年 6 月 30 日
(4)実施国	セネガル共和国
(5)活動地域	ティエス州ティエス県ティエス市

(6)活動概要

① 活動の背景：

セネガルにおける「障害」の状況

■セネガルは 2013 年の統計調査において、およそ 80 万人が何らかの障害があると言われている。セネガルの障害児・者が置かれている状況は厳しく、国立盲学校は1校しかなく、多くの視覚障害者が十分な教育を受けられずにいる。近年、セネガルもインクルーシブ教育を導入し、ダカールを中心に展開しているが、そこに通う障害者は喘息等の軽度の障害のある児童に限られている。また就労に関して、正規雇用者約 0.4 万人、未就労約 61 万人などセネガル政府が掲げるユニバーサルヘルスカバレッジ政策を障害者は十分に裨益できていない。

(参考：https://libopac.jica.go.jp/images/report/1000044898.pdf)

セネガルの「障害」課題に対してスポーツでできること

■「障害」課題の解決のために、街のバリアフリー化や障害者も当然にアクセスできる行政・福祉サービスの提供などの政策的アプローチがある。同時に、「障害」の原因を個人ではなく社会(障壁、人々の態度)が作り出しているという「社会モデル」の視点が不可欠である。

■そのためには、第一に障害者のエンパワメントと社会参加が促進されること、第二に「障害」を作り出している側が「社会モデル」の視点を持つこと、障害者との交流を通じてお互いに自己理解と他者理解を深めること、第三に障害者が開発における様々なレベル・場において意思決定に参加し、その結果として生み出された成果や機会に参加していくことが重要である。

■この観点から、スポーツを捉えると、スポーツを通じ、障害者自身の自己肯定感、自己効力感を育むことができ、他者(健常者含む)との協働や協力を通じて何らかの役割を担うことができ、その責任の下で社会的な活動に参加する機会を増加せることができる。

② **活動の目標：**障害当事者と共に、スポーツを通じセネガルの障害者のエンパワメントと社会参加を促進する。

1. セネガルの視覚障害者と肢体不自由者のスポーツへの参加状況、普及と競技力向上や障害者の社会参加の課題が分析される。
2. パラスポーツとインクルーシブ教育に関する関係者分析によって、今後の現地のプロジェクトへの協力者・団体が明確になる。
3. パラスポーツ（ブラインドフットボール）への参加者・頻度が増加する。
4. 継続的なユニバーサルスポーツ活動のため、障害当事者間、障害当事者と健常者間のネットワークが構築される。
5. 障害当事者の障害理解研修のパラスポーツファシリテーターが育成される。
6. イベント参加者の国際理解、障害理解が促進される。

2. 業務実施結果

(1)実施した内容

1 障害者の社会参加とスポーツをめぐる参加型調査

1-1/1-2：アウトリーチ・ベースライン調査

■スポーツにアクセスできていない/していない人々にアウトリーチし、障害者の人々の生活及びスポーツとの関わり（障害者のスポーツ実施状況、スポーツ参加への目的、参加を阻害する要因など）について実態と課題を調査しニーズを把握する。保健/社会活動省管轄のティエス市 Centre de Promotion et de Réinsertion Sociale（社会復帰促進センター 以下、CPRS）の協力を得て行った。具体的には、CPRS が作成したアンケート対象者実施リストに記載された障害当事者を直接訪問し、肢体不自由当事者の現地活動パートナーと共にアンケート調査を実施した。

1−3：参加型ワークショップ

■活動 7（7−1）の障害啓発にかかる活動として障害平等研修を実施し、「障害の社会モデル」の視点を参加者が発見・獲得した。ブラインドフットボールコーチ・選手、ボッチャファシリテーターの障害当事者、ティエス市パラスポーツ関係者が、「障害の社会モデル」の視点からセネガルにおける障害者とスポーツを取り巻く「障害」について考えながら、誰もがスポーツにアクセスできるティエス市を実現するための行動計画を立てるワークショップを実施した。

2 パラスポーツに関わる関係者分析

■ティエス市内でパラスポーツやユニバーサルスポーツを広げ、誰もがスポーツにアクセスできるティエス市を実現するため、市内のパラスポーツに関わるキーパーソンや関連団体を招待し、彼らと共に関係者分析のワークショップを実施。

3 パラスポーツ普及活動

3-1：体験会の開催（3-1 車いすスポーツ体験会は、4-2 ボッチャ体験会の開催に統合。）

3-2：ブラインドフットボール定期練習体制の支援

■国立盲学校、インクルーシブ教育校を拠点に、ブラインドフットボール元代表選手および現地の先生やコーチが定期練習できるよう、練習メニューの提案、女性の参加拡大に向けた提案、障害のあるなしによ

らない練習、現チームの活性化支援等を実施した。

3-3：ブラインドフットボールコーチ育成ワークショップ
■ティエス州パラスポーツ協会、セネガル視覚障害者スポーツ連盟、弊会が連携して、ティエス市内で新たにブラインドフットボールの指導及び指導補助ができる人材を育成するためのワークショップを実施した（目標値 3 名）。

3-4：全国大会の開催支援
■3 月中旬にコーチ育成講座を受講したコーチが練習や運営準備から関わり、ブラインドフットボールの市内大会を開催した。5 月下旬には 2015 年以来の全国大会として、セネガル視覚障害者スポーツ連盟による大会準備・運営を支援した。具体的には、連盟や運営関係者に開催に必要な各種ノウハウをマニュアルとして共有するとともに運営に必要なアドバイスを実施した。

3-5：コートの環境整備
■Tubulary Solution Sénégal（住友商事グループ会社）及び JICA セネガル事務所と協働し、INEFJA（国立盲学校）の校庭整備を実施し、校庭に散乱・埋没している産業廃棄物、ゴミ、ガラス片等を除去し、校庭利用に関するルールを定めた。

4 ユニバーサルスポーツを通じた機会の提供・居場所づくり
4-1：ユニバーサルスポーツの場作り
■障害者センター敷地内に、現地の障害当事者たちとの話し合いの下で、ユニバーサルスポーツのボッチャを障害のあるなしに関わらず親しむことができる場を整備した。

4-2：ボッチャ体験会の開催
■活動1でリーチした障害者も交え、活動拠点の障害者センターにてボッチャ体験会を開催した。当日の運営主体はセネガル人 2 名（肢体不自由者／非障害者）が担った。

4-3：障害当事者のファシリテーター育成ワークショップ
■ボッチャ体験会において、競技紹介、デモンストレーション、試合運営、審判を担える障害当事者の育成するためにワークショップを実施した。同時に、ボッチャボールを自作できるよう適正技術の研修もワークショップに組み込んだ。（目標値：3 名）

4-4：大会の開催
■ボッチャを通じ、障害の有無によらず地域の人々が交流できるよう、ボッチャファシリテーターが運営するボッチャ大会を障害者センター内で実施した。

5 日本とセネガルをオンラインでつなぎ、障害当事者同士による意見や技術の共有を行うとともに、日本のパラリンピアンを現地に派遣し、当事者同士によるエンパワメントの後押し
5-1：障害当事者派遣
■視覚障害当事者の落合啓士氏を現地に派遣した。ティエス州パラリンピック委員会、視覚障害者協会、視覚障害当事者と当事者同士で対話する機会を作り、日本とセネガルにおける視覚障害事情や問題に

関する意見交換を行った。国立盲学校やインクルーシブ教育学校の現場視察も実施。

5-2：オンラインワークショップ

■ティエス市でパラスポーツ・ユニバーサルスポーツに携わる障害者と非障害者を対象に、多様な人がスポーツにアクセスできるための取り組みや工夫を学ぶオンラインワークショップを開催した。鮎川福祉デザイン事務所の鮎川雄一氏によるユニバーサルスポーツを活用した地域コミュニティづくりの事例紹介と意見交換を実施した。

6 市民向けのオンラインイベントによる国際理解促進、「障害」啓発活動

■セネガルとの交流、支援を目的に活動している一般社団法人 Bokk Jambaar と共催で、現地活動の様子で発信し、「スポーツと開発」を大きなテーマとして、落合氏の渡航に合わせて~~第3回の~~オンラインイベントを開催した。「準備編」「渡航編」「帰国編」の 3 回を通じて、視覚障害当事者である落合氏と共に国際理解、障害理解につながる啓発活動を実施した。

7 障害啓発を目的とした研修開催

■活動 3−3、4−3 で育成された人材及びティエス市内でパラスポーツに関わる関係者を対象に、発見型学習をベースに「障害の社会モデル」を学ぶ障害平等研修を実施した。

8 視覚障害当事者とのティエス市のアクセシビリティ調査

■視覚障害者が市内を生活する上で、ティエス市内の主に 3 エリア（①ホテル、生活圏 ②ティエス市街地 ③乗合バス、車両停留所周辺）にどのようなバリアが存在するのかを視覚障害当事者/落合氏とともにアクセシビリティ調査を行った。

（2）実施成果：

① セネガルの視覚障害者と肢体不自由者のスポーツへの参加状況、普及と競技力向上や障害者の社会参加の課題が分析される。（関連活動：1-1,1-2、8-1）

■ティエス市内の障害者及びその家族の状況や障害者とスポーツに関する調査報告書が作成された。スポーツへのアクセスを阻害する要因が明確になった。

- ✧ 情報の不足。障害当事者自身はスポーツや体を動かす機会を求めているが、障害者が参加できるスポーツの場に関する情報の不足や、身の回りにスポーツを推奨する人物の不在が課題とされている。
- ✧ 怪我のリスク。幼少期からスポーツの経験が乏しく（参加させてくれない）、運動を楽しむコミュニティとの接触が制限されていることが明らかになっている。
- ✧ スポーツ施設への安心・安全な移動手段の欠如、サポーターの不在
- ✧ 社会における障害者への理解の不足

■落合啓士氏（全盲）と共に、公共サービスや市内移動のアクセシビリティの課題を調査しアクセシビリティ調査報告書としてまとめた。同時に視覚障害者がアフリカで活動する場合の同行援護業務に関する知見についても収集された。

② パラスポーツとインクルーシブ教育に関する関係者分析によって、今後の現地のプロジェクトへの協力者・団体が明確になる。（関連活動：1-3,2-1）

■「誰もがスポーツにアクセスできるティエス市を実現する」をテーマに関係者分析が実施され、同テーマにおいて重要な関係者が特定され、スポーツを通じた障害者の社会参加を推進する地域の組織、関係者の現状と課題などが参加者間で共有された。

- 参加者：ティエス州パラスポーツ協会1名、ブラインドフットボールコーチ1名、ブラインドフットボール選手1名、ボッチャファシリテーター2名

③ パラスポーツ（ブラインドフットボール）への参加者・頻度が増加する。（関連活動：3-2,3,4,5）

■特に現地からの要請もあり、女子チーム指導の観点から女性コーチ育成にも重点を置き、計6名（男女各3名）のコーチが育成された。

■コーチ育成ワークショップに受講したコーチによる定期的なブラインドフットボールの練習が男女ともに週 6 回実施されるようになった。現在、男女ともに練習参加が定着（男子平均 25 人、女子平均 10 人）し、 女子の参加人数は当初より 5 名以上増加した。国立盲学校在籍数（男子生徒 100 人、女子生徒 60 人）に対する参加者の全体割合は、男子が 25.0%、女子が 16.7%。

■全国大会の開催により、「ブラインドフットボールの発展と成功は、私にとっても重要。 そのために私は全力を尽くす」や「私たちに自信を与えてくれた。」と、コーチの意欲が向上した。また、参加選手にとっても、大会をきっかけに選手同士のコミュニケーション機会が増え、チームワークが向上した。

■参加者のある 1 名の選手（全盲、言語障害）は、ブラインドフットボール参加前は、家に篭りがちだったようだが、ブラインドフットボールの練習には休まず参加し、コミュニティとつながる機会になっている。

■JICA セネガル事務所、民間企業との協働によるコート清掃により、安心安全なスポーツ環境が整備された。さらに、使用前にゴミを拾うルールが設けられたほか、女子生徒が運動場を走る様子が観察されるようになり、以前は使用できなかったコートが使用されるなど、盲学校の生徒が安心・安全に運動に親しむ機会と場が拡大した。また、地域のサッカーチームも使用可能になったことで、障害の有無によらないインクルーシブな交流の機会・場が生まれた。

④ 継続的なユニバーサルスポーツ活動のため、障害当事者間、障害当事者と健常者間のネットワークが構築される。（関連活動：3-1,4-1,2,4,5-1）

- **ユニバーサルスポーツの場作り**

■障害者センターにて4名で始めたボッチャは、ボッチャ体験会、障害当事者のファシリテーター育成ワークショップ、ボッチャ大会などを通じ、障害者センター内で障害者と非障害者が交流できる機会が月 4 回開催されるようになった。また、これまでスポーツから縁遠かった層が新しくボッチャを始めている（9 名）。障害当事者のボッチャファシリテーターが育成されたこともあり、障害当事者らが主体的にボッチャを実施できるようになった。

■障害当事者のボッチャファシリテーターにより、障害者センターだけでなく、聴覚障害者協会、聴覚障害者職業訓練施設、聾学校、Special Olympics Sénégal のティエス州支部と協力してボッチャ体験会が開催された。

- **ボッチャ体験会の開催**

■運動やスポーツに触れる機会が乏しい障害児者にとって、ボッチャはルールが簡素で身体的負担が高すぎず、運動に親しめるため、障害の有無、障害の種別、老若男女など非常に多様な層に対してボッチャが広がっている（100名以上）。ボッチャ体験会では、参加者は、障害者センター関係者 19 人が参加。ボッチャ初体験者もいたが、参加者は、ボッチャ体験会を楽しんでいる姿が顕著に見られた。口々に「楽しい」「またやりたい」「次はいつやろうか？」など、高い参加意欲がみられた。

■重度の身体機能障害のある参加者は、初めはボールを近くにしか転がすことができたかったが、徐々に体の動かし方や力の入れ方を工夫してボールを遠くに転がすことができるようになった。ボッチャを通じ普段の身体運動にはない動きが増え、身体活動の増加に貢献した。

- **大会の開催**

■22 名が参加。参加者の属性は、障害者 15 名、非障害者 7 名（男性 17 名、女性 3 名（申込時点は 7 名）・子供 4 名）。運営に携わる障害当事者のボッチャファシリテーターからは、ユニバーサルスポーツとして、参加者募集時やチーム分け時に、多様な属性を混ぜる提案がされた。

■ボッチャ大会初参加者 7 名の内 1 名が活動計画 1-1 アウトリーチにおけるスポーツに関するアンケート調査対象者でスポーツに参加したことがない、当施設を訪ねたことがない障害当事者が参加した。大会をきっかけに行動範囲が拡大し、怪我への怖さからスポーツから遠ざかっていた当事者が体を動かす楽しさを覚えた。また、大会中には参加者同士が会話をしあって機能障害の症状や得意なプレーなどに合わせて作戦を立てて、優勝を目指して取り組む姿が目立った。

- **オンラインワークショップ**

■継続的なユニバーサルスポーツ活動のため、障害当事者間、障害当事者と健常者間のネットワークが構築されている姿が見られ、本ワークショップ参加者から、視覚、聴覚、肢体不自由、知的の各機能障害のある人たちが障害のない人たちと共に交流する機会が提唱された。さらに具体的に、Special Olympics Sénégal ティエス州支部の代表から、障害者センターと連携してユニバーサルスポーツフェスタ（参考 https://youtu.be/byd5bCBwE7k）をティエスで開催することを提案された。登壇した鮎川氏からは日本での取り組みがセネガルで役に立つことやセネガルでの障害分野でのスポーツを活用した取り組みに興味・関心をもったとの所感を得た。

- 参加者：7 名（ティエス州パラスポーツ協会 1 名、ブラインドフットボールコーチ 1 名、障害者センター2 名、Special Olympics Sénégal ティエス州支部 3 名）

⑤ 障害当事者の障害理解研修のパラスポーツファシリテーターが育成される。（関連活動 4-3、7-1）

- **障害当事者のファシリテーター育成ワークショップ**

■肢体不自由当事者 9 名のボッチャ体験会ファシリテーターを育成された。「腕の筋力が低いから難しかったが、少しずつ投げられるようになった」「ボッチャをした時に、地域の子どもたちも一緒に参加したことがあった。ボッチャを通じたら理想の社会を実現できる。」など、これまでの経験からボッチャの意義やボッチャを通じて作ることができるコミュニティの姿を参加者同士が共有した。また、「ボッチャはユニバーサルスポーツだから、女性も男性も、障害の有無もなく分けるべき」とのチ

ーム分けの工夫する姿も見られた。

- **障害啓発を目的とした研修**

■パラスポーツ関係者と云ども、ほとんどの参加者が障害を「医療モデル」で捉えていた。しかし、研修後、参加者全員が「障害の社会モデル」の視点を獲得した。参加者の発意により、ティエスでインクルーシブ教育を実践するプロジェクト関係者に対しても同研修が有効であることが提起されるなど、本研修により「障害インクルーシブ」にむけて参加者がエンパワメント(行動の獲得)している。

- 参加者6名:ブラインドフットボールコーチ 2 名、ブラインドフットボール選手 1 名、肢体不自由障害者センター2 名、Special Olympics Sénégal ティエス州支部 1 名
- 講師:日本人障害当事者のファシリテーター2 名

⑥ イベント参加者の国際理解、障害理解が促進される。(関連活動 6-1)

- **オンラインイベント**

■国際協力に普段関わることのない参加者が多い中で、Thiès 市を視覚障害当事者の落合氏が歩き、活動している様子を目の当たりにしたことで、視覚障害者に対する理解、障害者が開発主体として参加することの意義そしてアフリカ理解が深まった。また日本のパラスポーツ愛好者、関係者が国際協力に対する興味・関心を持つきっかけとなった。

- 参加者:出発直前編 13 名、現地活動編 25 名、活動報告編 22 名
- 参加者アンケートの感想(抜粋)
  今回私の学びとしては、共有の重要性である。一緒に何かをする、一緒の空間にいるそれは何かを共有している状態であり、そこから、共通するものを感じたり、共通認識が測れたり広がっていくものだということである。学校現場では、つい忙殺されてしまうが、共有することで、互いに感じ得るものがあるということは改めて意識しておきたい。 たくさんの広がる夢が現実になっていくような気がして、嬉しくもあり、楽しみだと感じました。

(3)得られた教訓など:

■当初、2023 年 2 月下旬にブラインドフットボール全国大会を計画し、障害当事者の派遣もその予定に合わせていた。しかし、セネガル視覚障害者スポーツ連盟との協議の中で大会開催を 3 月中旬に延期、また 5 月下旬に延期、さらに開催 10 日前に控えた 5 月中旬に、国立盲学校の都合で 1 週間早く大会を開催しなければならない状況となり、大会準備や当事者の派遣スケジュールも大幅に変更する必要があった。今回の事例では、開催場所である国立盲学校校長との意思疎通・連絡調整不足、盲学校寄宿生による宗教行事を事前に把握できていなかったことが大きな要因であった。したがって、今後の事業実施においては、開催決定を左右するキーパーソンを明確にすること、キーパーソンを含めて意思決定の場を設けていくことが望ましい。

(4)今後の活動・フォローアップの方針:

■本プロジェクトを通じて、ブラインドフットボールコーチ6名、ボッチャファシリテーター9名が育成された。また、プロジェクトを通じて、障害種別を超えた組織間のネットワークが形成された。さらに、それらの組織間の発意により、障害種別を超えた活動の連携が発現している。

■弊会は、上記成果をふまえ、来年度以降は下記の通り協力する。

今後の活動(2024～2026 年の 3 ヶ年)

■ 目的:セネガル*における障害者の社会参加促進と障害インクルーシブな社会開発
＊重点地域:Thiès 市

■ 目標:
1. スポーツを入り口とする、障害課題に取り組む人材の強化
2. スポーツを通じた、社会と障害者の繋がりを支える地域共生コミュニティの開発

■ 活動:
1. 障害者のスポーツ活動支援の強化
1.1 スポーツ体験会の定期開催支援
1.2 スポーツ大会の定期開催支援
1.3 障害者のスポーツへのアクセシビリティ整備
1.4 ライセンス制度の構築
1.5 現地関係団体の基盤強化
2. スポーツと障害課題に携わる人材育成
2.1 視覚障害者に多様な運動機会を提供するコーチの育成
2.2 ユニバーサルスポーツによる場作りを啓蒙するボッチャファシリテーター育成
2.3「障害の社会モデル」獲得のための障害平等研修の実施
2.4 障害平等研修の仏語、現地語ファシリテーター育成
2.5 日本とセネガルの障害当事者の対話、意見交換会
3. 障害者の社会活動・生活実態の実態調査
3.1 当事者対話型のアウトリーチ調査
3.2 障害者の就労機会の創出、職域拡大に向けた基礎調査
3.3 ロールモデルとして様々な障害種別の当事者派遣
3.4 障害当事者派遣による障害課題の問題発見、課題解決のプログラム
3.5 現地の障害者によるアクセシビリティ調査と地域行政、関連団体への提案
4. 障害者に対する理解の向上
4.1 スポーツ体験会／大会を活用した社会に向けた障害啓発、健康(ex.栄養・衛生・予防)等に関する障害当事者向けの啓発活動の併催
4.2 障害理解・交流を目的とした教育機関における障害啓発プログラム
4.3 白杖やシンボルなどを活用した社会への障害理解啓発

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1)活動中のエピソード・感想など

日本の視覚障害当事者の落合氏がセネガルに渡航し、セネガルの視覚障害当事者の現地パートナーである Khadim FALL 氏と対談する場を設けた。彼はスポーツで障害者の未来を変えたいと願い行動している人物であり、その対談の中で、「セネガルの未来を変えるには、ハディム氏や Aly DIA 氏(ティエス州パラスポーツ協会会長)のような人物がセネガルに増えていくこと。それが重要なのだ」と言葉にして語ってくれた。まさに弊会が目指す未来を現地パートナーの彼の口から発されたこと、それが強く印象に残っている。元々ハディム氏は想いがありつつも、視覚障害当事者でありながらも視覚障害関係者とは関

わりを持たず、巻き込まれることに抵抗感を持っていた。しかし、弊会のワークショップや取り組みに参加を促すことを通じて、彼の発案でブラインドフットボールの大会に関係者を巻き込み開催したいと動き始め、PEER をセネガルに増やすことの価値を口にしたことは、本プロジェクトを通じた大きな成果であると感じている。スポーツをきっかけに、障害課題に取り組む人材の強化を目標にしているが、まさにプロジェクト通じて関わる人物の変化を目の当たりにした瞬間であった。

(2)活動の写真

1-1 アウトリーチ、1-2 ベースライン調査

アンケート調査の様子

アンケート調査の様子

1-3 参加型ワークショップ

ワークショップの様子

アイデアをブレストした付箋

アクションプランの模造紙

2-1 関係者分析ワークショップ

ワークショップの様子

関係者分析一覧

ワークショップの集合写真

3-2 ブラインドフットボール定期練習体制の支援

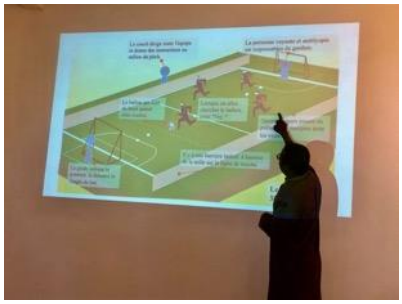
練習の様子

練習の様子

練習の様子

3-3ブラインドフットボールコーチ育成ワークショップ

座学の様子



競技説明の様子

実地講座の様子

3-4全国大会の開催支援

試合の様子

試合後の選手

待機中のチーム

3-5コートの環境整備

コート整備の様子

コート周りの伐採

ブラインドフットボールの寄贈品

4-1 ユニバーサルスポーツの場作り／4－2 ボッチャ体験会の開催

聾学校での体験

体験者の様子

Special Olympics での体験

4－3 障害当事者のファシリテーター育成ワークショップ

ワークショップの様子

ボール製作の様子

ボッチャの競技説明の様子

4－4 大会の開催

参加者の様子

大会の様子

参加者との集合写真

5－1 障害当事者派遣

FALL 氏と落合氏の対談

インクルーシブ教育校訪問

国立盲学校の子供達と落合氏

5−2 オンラインセミナー

参加者との集合写真

参加者の発言中の様子

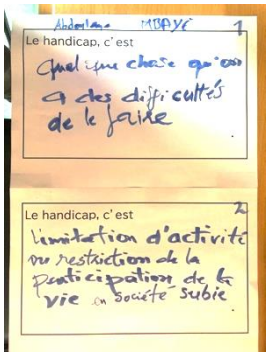
登壇者:鮎川氏

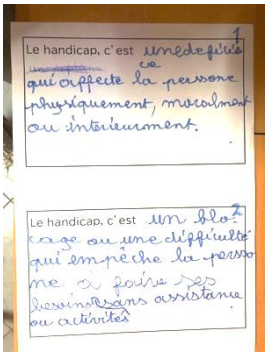
6-1 オンラインイベント

オンラインイベントの告知

7-1 障害平等研修

参加者との集合写真





参加者のワークシート:「障害」の定義

8-1 アクセシビリティ調査

街中の調査の様子

市場の調査の様子

（3）JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

視覚障害当事者の渡航に関して、丁寧かつ柔軟にサポートいただくことで様々なチャレンジすることができた。まず JICA 基金活用事業で合理的配慮の予算を活動費とは別にいただき、同行援護のサポートを活用して視覚障害当事者が業務従事者として渡航可能になり、セネガル現地で安心安全に視覚に障害があっても活動できたことは非常に良かった。弊会は、障害課題にアプローチするにあたり、障害当事者と共に活動することを第一としている。日本からロールモデルとして現地に当事者が訪問し、経験や日本の事例を対話の中で伝えていくことに価値があり、現地の当事者自身に変化をうめると考えている。日本から障害当事者をセネガルに継続して派遣できる体制を築きたいと考えており、JICA 基金活用事業を活用しその基盤を整備することができた。また JICA 基金活用事業のため、現地の JICA セネガル事務所と活動で連携することもできたことは、継続してセネガルで活動する上で重要なステークホルダーと良い関係を築く機会となった。事務所関係者と情報交換や意見交換会の場などもセッティングでき、今後もバックアップいただける旨のコメントをいただけたことは、より活動の成果を高めていくことに繋がると感じている。